

—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

シリアのイスラーム主義の内外の系譜

平成 25 年度中東情勢研究会第 3 回会合

開催日時：平成 25 年 10 月 29 日（火）18 時～20 時、於：中東調査会

報告者：高岡豊（中東調査会）

報告題目：現代シリアのイスラーム主義：内外の系譜

出席者：青山弘之（東京外国語大学教授）、錦田愛子（東京外国語大学助教）ほか 9 名、中東調査会：金谷

概要

\* 高岡より、以下の通り報告した。

1. シリア紛争でイスラーム過激派の勢力が急速に伸びている原因を説明すべきである。そのために、アサド政権、ムスリム同胞団、シリアの宗教界、諸外国などのアクター間の関係の分析を試みる。特に、アサド政権とシリア国内に存在する諸アクターとの関係は、アサド政権がシリア社会の各構成要素を取り込む道具として用いてきた人民議会に、諸アクターがどの程度参加しているかを関係の濃淡を計る指標とする。
2. シリア国内では、1940 年代～1950 年代にはムスリム同胞団が政治勢力として議会に進出するなど、イスラーム主義を掲げる団体が政治活動に進出した実績があった。また、1970 年代～1980 年代の反体制武装闘争では、「戦闘的前衛」とその創設者のマルワーン・ハディードのような象徴的な組織・活動家も現れた。一方、アサド政権によるイスラーム宗教界への働きかけは、イスラーム学者や私立のイスラーム教育機関の一部と選択的に関係を構築するにとどまり、国家権力がイスラーム宗教界を直接管理・運営するような政策は採られなかった。こうした中で、私立教育機関、慈善団体を運営するイスラーム団体の活動が拡大するようになったが、これらの団体の活動はシリア国内でのモスクやイスラーム教育機関の量的な拡大とあわせ、シリア社会のイスラーム化の表れと考えられた。また、イラク戦争やイラクへのイスラーム過激派の潜入問題の影響から、アサド政権がイラクへの潜入を支援したイスラーム過激派が、現在ではアサド政権を攻撃するようになったと主張する先行研究がある。ただし、こうした研究には、アサド政権が公然と送り出した「イラク戦争開戦前にイラク入りした義勇兵」と、2004 年ごろから活動が活発化したイスラーム過激派の外国人戦闘員を混同している場合も見受けられることから、「アサド政権によるイラクへの外国人戦闘員の潜入支援」を現在のシリアでのイスラーム過激派の勢力伸張と直接結びつけるべきではない。
3. シリア国外の要因としては、海外に亡命し、在外の政治エリートの中心的存在となったムスリム同胞団と、同派から派生した諸派閥・団体がある。このほかにも、現時点での消息や

活動は不明であるが、アブー・ムサブ・スーリーが、シリアでの反体制イスラーム武装勢力出身の活動家として注目される。同人は、強固な上意下達型の組織ではなく、ネットワーク型の運動を通じたイスラーム過激派の武装闘争を提唱し、国際的なイスラーム過激派の行動様式に影響を与えた人物である。また、外国人戦闘員の潜入については、イラクの事例とシリアの事例を比較すると、戦闘員の「送り出し国」と「受け入れ者(イラクとシャームのイスラーム国、ヌスラ戦線など)」が共通である。このため、特に戦闘員を送り出す諸国と、そこにある戦闘員の勧誘・派遣活動の担い手がアクターとして重要である。これに加えて、シリアの反体制武装勢力に対し、イスラーム主義的な扇動やイデオロギーに基づく支援が行われており、「外部からの支援をより容易に獲得する」ためにイスラーム主義的な主張や言辞を用いる武装勢力も多いと思われる。従って、イスラーム主義的なイデオロギーに基づいて武装勢力に資源を提供する、国家・非国家の主体も、シリアにおけるイスラーム過激派の勢力拡大の主因と考えられる。

4. アサド政権とシリアのイスラーム宗教界との関係は、前者が後者を取りまとめて一元的に管理するという努力が近年になるまでほとんどなされなかった。また、イスラーム宗教界から人民議会に参加した個人・団体もごく少数だった。従って、このような関係は、部族、名望家、政党・組合など、そのほかのシリア社会の構成要素とアサド政権との関係に比べ、範囲も深度も限られる関係だった。また、ムスリム同胞団やその他のイスラーム団体も、相互に連帯したり、反体制武装闘争のような目的・イデオロギーを共有したりしてきたわけではなかった。ここまでの考察から、現在のシリアの反体制武装勢力の中でイスラーム過激派の勢力が拡大している要因としては、シリア国内の要因よりも、外部からイデオロギー・人材・資源が一挙に流入してきたことと、それを担う外部のアクターの影響が強いと思われる。

\* 質疑では、シリア政府がイスラーム宗教界の直接的・一元的な管理を行わなかった理由など、シリアの政府とイスラーム宗教界との間の関係や、イスラーム宗教界の構造についての質問、「自由シリア軍」のようなイスラーム主義を標榜しない武装勢力は、アクターとしてどのように位置づけられるのか、などの質問が出された。また、今般の報告を今後展開する上では、「シリア社会のイスラーム化」と「反体制武装闘争のイスラーム主義化」の相関を明らかにすることが重要であるとの提言や、「シリア社会のイスラーム化」、「イスラーム主義」を明確に定義する必要があるとの指摘があった。

文責 高岡豊

---

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799